



風の強くない日に野焼きをして春を待つ



大山千枚田は天水田。春先に降る雨で棚田に水がたまっている

NPO法人 大山千枚田保存会



耕作放棄地で綿（上）と藍を栽培、糸紡ぎや染色などを体験



小学生の祭り寿司体験。バラとカタツムリが見事に完成（右）



首都圏の棚田を活かして地域おこし

南房総の山あいに375枚の小さな水田が広がる「大山千枚田」は、東京からいちばん近い棚田だ。地滑り地帯である嶺岡山系の山ふところにあつて耕地整理が遅れたため、江戸時代前から続く田園風景が残された。

NPO法人「大山千枚田保存会」（千葉県鴨川市）は、棚田を活用した地域おこしに取り組むグループだ。1997年に発足し、関東初の「棚田オーナー制度」を2000年に始めるなど、多様な活動を繰り返している。

「中山間地域の過疎高齢化で遊休農地が増えてきて、棚田のきれいな景観を生かした地域おこしをしよう」と発足しました。99年に農林水産省『日本の棚田百選』に大山千枚田が選ばれて注目され、高知県発祥の棚田オーナー制度を鴨川市が導入、これを保存会が運営することになりました」と、保存会事務局長の浅田大輔さんは話す。

鴨川市の棚田オーナー制度は、100㎡あたり年間3万円の会費を払ったオーナーが、田植え、草刈り、稲刈り、脱穀、収穫など年7回ほどの作業を基本に「MY田んぼ」に通い、収穫した米を得る仕組みだ。千葉県民のほか、東京、神奈川、埼玉の都市部に

幸い、土壌が強粘土質であるため、雨水を水田そのものに蓄えて実りを得てきた。春先は雪解け水もあつて、田植えに必要な豊富な水が得られる。自然を生かした棚田は生きものの宝庫で、トウキョウサンショウウオやニホンアカガエルといった希少種を含め、約1000種が生息している。

農業と生態系のかかわりを知つてもらおうと、保存会は設立当初から棚田の自然観察会を開いてきた。「生きものの名前を聞かれて答えられない」と農家から相談され、観察会に来た子供たちとも協力して2年かけて動植物を調べ、「生き物図鑑」を完成させた。この「棚田の生物多様性の普及啓発活動」は、14年秋、「生物多様性アクション大賞2014」でセブンイレブン記念財団賞を受賞した。

「田んぼを放っておくと、生きものがいなくなつて、お米やお餅も食べられなくなつちゃうんだよと、子どもたちに話しています。観察会で使った調査シートを持ち帰つて、家の近所でも生きも

住む136人がオーナーになり、農家の指導を受けて、家族連れで田んぼを耕している。1人に農地一区画を任せると、参加者全員に収穫を分ける「棚田トラスト制度」も02年に始めた。

また、稲作に向かなくなつた場所を大豆畑にし、共同で作付け、収穫、豆腐・味噌作りを行う「大豆畑トラスト制度」、酒米を栽培して酒造会社で仕込んでもらう「酒づくりオーナー制度」、綿藍を栽培して紡ぎや染めを体験する「綿藍オーナー制度」、民家の改修や新築を通して伝統技術を学ぶ「家作り体験塾」なども行っている。

「地域にある、あらゆるものに注目して、プログラムに組み入れてきました。ものづくりの工程を知り、お米や家など、身の回りのものの価値をとらえ直すプログラムです。地元農家の人たちは、何気なく伝承してきた知識や技術を、都市の人たちにあたたく教えてくれています」（浅田さん）

大山千枚田は、日本で唯一、雨水のみで耕作を行う天水田として知られる。地滑りしやすい地盤のため池が作れず、湧水もない。いちばん近い川でも500m離れていて水を引けない。

のを探してごらんと勧めています。サンショウウオはいなくても、芝生や道端にバッタやチョウぐらいはいるはず。大自然や農村も大事だけれど、ふだん暮らしている家の周りの環境を知り、よくする気持ちを持つことが第一だと思います。家の近くでバッタを20種類もみつけたという手紙をもらうと嬉しいですよ」（浅田さん）

そう話す浅田さんは横浜出身で、昆虫の調査で学生時代から房総半島に通い、卒業後は鴨川に移住して保存会のスタッフになった。発足して18年。メンバーに共通するのは、中山間地域を盛り上げて、里山の暮らしと生態系を守り伝えたいという思いだ。

「課題は多くても、取り組むことで地域が面白くなるから、やりがいがある。やりたいと思つたことは、否定せずにやってみる。農家レストランの準備も始めています。雑談からアイデアが生まれることもあるし、会話はとても大事だと思います」（浅田さん）

棚田を耕す人がいる限り、活動を続けていきたいという。春になると、田んぼが新緑と光で彩られ、生きものにぎわう。房総半島の棚田は、首都のすぐそばに息づく貴重な原風景だ。

田植えは数日にわたり、オーナーやトラストメンバー、体験学習の子供たちなどでにぎわう



泥田は子供たちにとって最高の遊び場だ

大豆畑トラスト制度でつくられた味噌



例年、8月末から稲刈りが始まる。収穫するのは長狭（ながさ）米とと呼ばれるこの地方特有の良質の米

9月、棚田の畦は彼岸花で彩られる



冬も水を抜かないため、天水田は多様な生物のすみかとなる

セブンイレブン記念財団が支援しています